

戦没者の慰霊・追悼と
戦争を語り継ぐことが遺族会の使命

市遺族連合会 小山賢和会長 千厩町磐清水・78歳



遺族会は1946年～47年、戦没者の慰霊・追悼と遺族の生活の安定を目的に全国各地で結成されました。

終戦から70年が経ち、国民の80%以上が戦後生まれといわれています。遺族会員も高齢化。世代交代が進む近年は、戦没者に対する慰霊・追悼の意識が薄れているように感じます。

戦没者は、日本の安泰と繁栄を信じながら、命を落としました。今日の自由と平和は、230万人もの犠牲のうえに成り立っています。戦没者の慰霊・追悼を継続していくことは、遺族会だけでなく国民全体の責務です。

遺族会の使命は「二度と戦没者や戦没者遺族を出さないこと」。平和な日本を守り続けるには、悲惨で残酷な戦争の教訓を後世に語り継ぐことが大切です。戦後70年を迎えた今、戦争の記憶の風化を防ぐことこそが、最も重要な課題です。

「70年間、戦争で人が死んでいない国」
この国を守り続けてほしい

南小支援ボランティア 豊村富司さん 宮坂町・83歳



「戦争は殺し合い。だから、絶対にすべきじゃない」。これは、戦争を経験した人だから言えることです。

2013年度から始まった南小の戦争学習。私は、支援ボランティアとして、児童に戦争の実体験を話しています。当時、13歳だった私が機銃掃射にあったこと、友人が空襲で亡くなったこと、物資や食糧に乏しかった戦時下の生活のこと。児童の「教科書の中の戦争」は、私たちの生の声を聞くことで鮮明になります。戦争学習は、戦争に関心を持ち、自ら学習したりするきっかけになると確信しています。

終戦から70年。当時の記憶を語れる人は、どんどん減っていきます。その中で、戦争の記憶を子供たちに語る意義は大きいはず。日本は「70年間、戦争で殺された人と殺した人がいない国」。戦争の記憶を伝えることで、平和な国を引き継ぎたい。体力が続く限り、子供たちに戦争の記憶を伝え続けます。

日本は、平和を取り戻しました。

しかし、世界にはいまだ戦争や紛争を続けている地域もあります。

戦争の犠牲になった人のため、日本が平和であるために

私たちにできることを考えます。

証言 Episode 4

戦争と平和を
考える



平和な世界を願って

戦後69年目の「戦没者追悼式典」は、2014年10月16日に行われました。市内の戦没者は4606柱。出席者は、祭壇に深々と頭を下げ、涙をぬぐいながら花を手向けていました。戦争は、多くの人の心に癒えない傷を残しています。

本市は2006年、新たに各自治体の平和への決意をまとめた「非核平和都市」を宣言。非核三原則の堅持と核兵器の廃絶、戦争の根絶を強く訴えています。

非核平和都市宣言

2006年6月29日、市議会は「非核平和都市」を宣言しました。宣言では「かけがえのない青い地球を守り、子供たちに引き継ぐことは、今を生きる全ての人々の果たさなければならない責務」とし、非核三原則の堅持と核兵器の廃絶を強く求めています。



反核・平和マラソン

岩手自治労連青年部は、1986年から「反核・平和マラソン」を実施。今年で30回を数えます。県南と県北の2つのコースを、4日間かけて各自治体の若手職員がたすきをつなぎます。ランナーは、沿道に核兵器と戦争のない平和な世界の実現を呼び掛けながら走ります。



戦争の記憶を後世へ

終戦から70年。現在、戦後生まれの人が、国民の約80%を占めるといわれています。歳月とともに戦争体験者は減少し、戦争の記憶を伝えられる人も限られています。戦争の記憶は、体験した人たちにとってつらく悲しいものです。それでも、戦争の記憶を後世に残すため、精力的に活動している人たちがいます。

南小学校(藤村美千代校長、児童497人)では、2013年から戦争学習を開始。講師は、地域の戦争体験者や戦没者遺族です。児童は、講師の実体験をもとに、戦争と平和について学んでいます。講師の豊村さんは「戦争の記憶を語り継ぐことは、平和の大切さを伝えること。戦争の記憶を後世へ残すことは、平和な未来を託すことです」と話します。

また、岩手自治労連青年部では「反核・平和マラソン」を実施。原水爆禁止一関市協議会は「原爆・ネル展」を開くなど、各団体が核兵器のない平和な世界の実現を訴えています。

平和を取り戻した日本。しかし、70年の歳月が経った今も、残された遺族の悲しみや憎しみは消えませんが、一方で、世界にはいまだ戦争や紛争が続いている地域もあります。私たちは、戦争の当事者ではないからといって、その事実から目をそらすことはできません。

巡りました。そのほか、各団体や個人などで戦争の記憶をまとめた本を出版するなど、さまざまな形で記憶の継承活動が行われています。

かつて、この国で悲惨な戦争がありました。たくさんの人たちが亡くなった、傷ついたりしました。戦争がない世界を訴えるのは、核兵器の恐ろしさや戦争の悲惨さを知っているから、戦争を経験したからこそ、平和を求めるのです。

戦没者のため、残された遺族のため、戦争の犠牲になった全ての人たちのために「今、私たちができること」。そして、10年後、20年後の日本が平和であるために「今、私たちにできること」。それは、戦争の悲惨さと平和の尊さを語り継いでいくことです。

あなたは伝えられますか。かつて、日本で戦争があったことを。この地が戦場になったことを。310万人もの人たちが、命を落としたことを。未来は、今を生きる私たちの手にかかっています。

Interview 戦争学習に参加した子供たちに「戦争と平和」について聞きました。

伊藤知希さん
いとう・ともき
南小・4年



戦争学習で、平和な世界にするために「乱暴をしない」「武器を持たない」ことが、大切だと勉強しました。ほかの国と、協力し合って戦争がない世界を目指したい。

小野寺将隼さん
おののでら・まさとし
南小・4年



戦争は「とても恐ろしいもの」だと思いました。戦時中の出来事は、今の日本では考えられません。優しい気持ちを持って、世界から戦争をなくしたいです。

作並樹奈さん
さくなみ・じゅな
南小・4年



戦争学習を通して、お父さんのおじいちゃんが戦争に行った経路について調べました。平和な世界にするため、けんかをしないで国同士で支えあっていきたい。

川口人諒さん
かわぐち・ひゅうま
一関小6年



テレビで戦後70年の番組やニュースを見て「清庵学び塾」に参加しました。戦争は絶対にしてはいけないもの。平和な日本を守っていきたいです。

小野寺胡羽さん
おののでら・こは
一関小5年



「清庵学び塾」で、一関空襲の勉強をしました。爆弾の破片を見たり、たくさんの方が亡くなったことを学びました。戦争はこわいという思いが強くなりました。

高橋伶那さん
たかはし・れいな
一関小4年



お母さんと「清庵学び塾」に参加しました。一関で空襲があったことにびっくりしました。戦争はすごくこわいもの。みんな仲のいい世界にしたい。